

農業技術情報

2023年5月1日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128
JA幕別町 0155-54-4118
JAさつない 56-2131
JA帯広大正 64-4591
日甜幕別原料事務所 54-2756
幕別町農林課 54-6605

<麦類>

1 秋まき小麦

(1) 2023年産きたほなみの生育状況と追肥判断

起生期は平年より2日早く、4月は温暖に経過したため生育は進み、幼穂形成期も平年より3日早い状況です(表1)。ほ場条件やは種時期によりほ場間差はありますので生育状況を確認しましょう。

生育状況に応じた窒素分肥については前回技術情報および表2を参照してください。

表1 きたほなみの生育期節(幕別町)

	2023年	平年値	早晚	
起生期	3月29日	3月31日	2日早い	※起生期：春季に至り40~50%が生長を開始し、葉の起立し始めた日
幼穂形成期	4月28日	5月1日	3日早い	※幼穂形成期：主稈の幼穂長が平均2mmに達した日

(参考) きたほなみの生育(4月28日 幕別町14ほ場)

	2023年			平年値 (幼穂形成期調査)
	平均	最大	最小	
茎数(本/m ²)	1,776	2,410	1,064	1,612
草丈(cm)	20.3	24.8	14.2	14.1
葉色(SPAD)	44.7	51.8	38.5	47.6(暫定値)

表2 きたほなみの幼穂形成期窒素分肥量の目安

茎数の目安 (4月下旬時点)	窒素施肥量(kg/10a)	葉色(SPAD)の目安 (4月下旬時点)	調節対応
2,000本/m ² 以上	4kgを基準に(起生期~幼穂形成期の合計分肥窒素量は8kg/10a以内とする)	濃い(約46以上)	
2,000本/m ² 未満		淡い(約46未満)	早急に行う

(2) 雑草対策

タイミングを逃さないよう適期に散布します。は種後に除草剤を未散布、または連作ほ場は特に注意が必要です。散布に当たっては適正使用に努め、薬害の発生に注意しましょう。

(次頁表3参照)

融雪水の滞水などにより部分的に裸地となっている部分は特に雑草が繁茂しやすいため除草管理に気をつけましょう。

表3 麦類の除草剤使用例

薬剤名	処理方法・使用時期・10a使用量		回数	備考
	秋まき小麦（春期）	春まき小麦		
エコパートフロアブル	止葉抽出前まで （収穫45日前） 50～75m l	小麦の2～4葉期 （収穫45日前） 50～100m l	2	展着剤、殺虫・殺菌剤と混用しない。高温時に使用しない。
MCPソーダ塩	麦の幼穂形成期 （収穫45日前） 300g	小麦の5葉期 （収穫45日前） 200～300g	1	晴天高温時に散布する（日中20℃以上）
バサグラン液剤	小麦の幼穂形成期 （収穫45日前） 100～200m l	小麦の生育期 （雑草の3～5葉期） （収穫45日前） 100～200m l	1	散布後の降雨により効果が劣る。雑草が大きくなると効果が劣る。
ハーモニーDF	1年生広葉雑草 節間伸長開始期～穂ばらみ期 3～10g （収穫45日前）	ギンギン類 小麦の幼穂形成期 （収穫45日前） 3～5g	春播栽培の3～5葉期 3～5g （収穫45日前）	ギンギン類には処理後3週間から抑制効果が現れるが、効果の完成には7～8週間を要する。散布後は専用洗浄剤を使用する。

2 春まき小麦

作況ほ場は4月13日は種、4月27日に芽揃を確認しています。雑草対策をする場合は、令和5年度防除ガイド（紫色の冊子）p11～12を参考に、除草剤を適期に散布してください。

3 植物成長調整剤の使用

今年は平均的には茎数が多めです。倒伏が懸念される場合は茎稈伸長抑制剤の散布も検討しましょう（表4）。薬害を防ぐため、どの薬剤も他剤との混用は避けます。

表4 茎稈伸長抑制剤の使用例

薬剤名	使用時期	使用量 (m l/10a)	使用回数	備考	
サイコセルPRO	秋小麦	幼穂形成期	150～200	1	・散布時期が遅れると効果が劣る ・高温時の散布は薬害の恐れがある
		出穂前20～10日 （草丈40～60cm）	200～300	1	
	春小麦	麦の6葉期前後 （草丈30～40cm）	150	1	
エスレル10	秋小麦	止葉期～出穂始期	200～333	1	30%以上の出穂をみてからでは倒伏軽減効果が劣る場合があるので適期に処理する
	春小麦				
カルタイムフロアブル	秋小麦	止葉期～出穂始期	150	1	過度な抑制を避けるため、使用時期・使用量を遵守し、多量散布や重複散布とならないよう注意する
	春小麦				

< 豆類 >

1 は種の準備

(1) 種子に合ったは種板を準備

必ず使用する種子の大きさを確認し、目標とする栽植株数（表5）となるよう粒大に合ったは種板を準備しましょう。

表5 栽植密度の目安

区 分	栽植密度 (株/10a)	畦幅×株間の目安 (cm)	
大豆： 大粒 (ユキホマレ等) コンバイン収穫等密植の場合	8,300	66 × 18	60 × 20
	11,000	66 × 13	60 × 15
小粒 (ユキシズカ等) コンバイン収穫等密植の場合	12,500~16,700	66 × 12~9	60 × 13~10
	27,000~30,000	66 × 5 (1粒)	60 × 6 (1粒)
小豆※ / 菜豆	8,300	66 × 18	60 × 20

※「きたろまん」は5月下旬は種において、1.5倍程度（25,100本/10a）までの密植により、成熟期の前進と増収が期待できる。ただし、倒伏が増加する事例があるので生育旺盛なほ場では標植とする（H31指導参考）。

(2) は種適期

は種は地温が十分に上がり（10℃以上）、遅霜の影響がなくなる時期になってからとします。地温が上がらず土壤水分が高いと出芽まで時間がかかり、タネバエの被害が懸念されます。

(3) 種子消毒

* 薬剤による種子消毒を徹底し、欠株や生育遅延を回避しましょう（表6）。

- ① ダイズわい化病は、ジャガイモヒゲナガアブラムシが媒介して発生します。春先からの気温が高いと有翅虫の飛来が早まります。
- ② タネバエは牧草地跡や未熟有機物施用ほ場、土壤水分が高いほ場で多発します。発生が懸念される場合には、種子粉衣を実施しましょう。

表6 豆類種子処理剤例

薬剤名	使用量 (種子60kgあたり)	回数	対象病害虫										
			大豆					小豆・菜豆					
			立枯病	苗立枯病	紫斑病	タネバエ	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	立枯病	(小豆) 褐斑細菌病	(菜豆) かさ枯病	タネバエ	アブラムシ類	
クルーザーFS30	360ml	1				○	○					○	○
クルーザーM AXX	480ml	1		○	○	○	○	○				○	○
チウラム80	120~300g	1	○					○					
粉衣用ペアーカスミンD	180g	1		○		○				○	○	○	

* 大豆で「クルーザーFS30」を使用する場合、「チウラム80」と必ず併用する。

* 「クルーザーM AXX」は「クルーザーFS30」より乾きにくいいため、特に小豆・菜豆は早めに準備する。

* 「粉衣用ペアーカスミンD」は大豆の斑点細菌病、「クルーザーM AXX」は小豆の茎疫病、菜豆のリゾクトニア根腐病にも登録あり

(4) 根粒菌の接種

未接種の種子には、消毒後、最後に根粒菌を接種します。

処理は **クレーザー → 殺菌剤 (MAXXは不要) → 根粒菌** の順で行います。

< てん菜 >

- ・強風時や、翌日低温が予想される場合、移植作業を中断しましょう。
- ・降雨後、無理な定植・は種作業は控えましょう。初期生育、発芽の不良に繋がります。
- ・風害・湿害対策のため畦間サブソイラー・深耕カルチを施工しましょう。
- ・移植栽培と直播栽培で登録内容が異なるので、除草剤は防除ガイド（紫色の冊子）を参照し適期に使用しましょう。

野菜

< ながいも >

例年、ほ場での不萌芽が多い場合は、催芽時の湿度が高すぎる場合があります。過湿を抑える、換気を増やすなどの対策をしてください。

ながいもの催芽湿度は80%が推奨されています。ただし、湿度80%の催芽は期間が長くなります。植え付け日近くになっても芽の動きが悪い場合は換気に注意し、加湿してください。

1 催芽管理

- ・ 1日1回、酸欠および高湿度にならないように換気を行ってください（最低でも3日に1回は必ず）。換気が不十分な場合、植え付け後の不萌芽の原因となります。

換気不足、過湿環境が考えられる種子の状態

- ・ 不定芽から複数の根が出ている。
- ・ 1つの種子に複数の不定芽が形成されている。
- ・ いも優先芽（不定芽の下に小さいいもができる）が形成されている。

根のない△型の芽
1つが理想



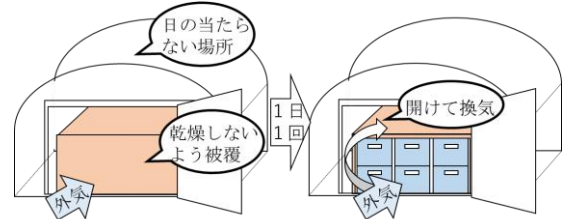
- ・ 青かびや腐敗が生じた種子はすみやかに除去し、感染拡大を防いでください。

2 順化

芽が小豆～大豆程度の大きさになったら催芽を終え、順化处理を行います。順化温度は10℃が目安です。12℃以下になると芽の伸長はほとんど停止します。

順化のポイント

- ・ 涼しい日陰の場所で外気に慣らす。
- ・ 芽が乾燥しないようにブルーシート等で被覆する。
- ・ 1日1回は被覆資材を開けて換気する。



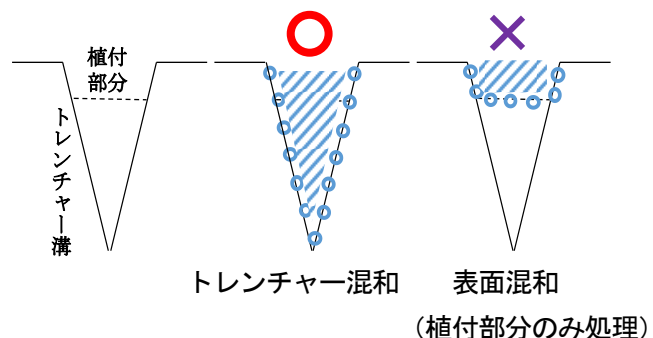
3 耕起

ほ場が湿潤な時に深耕すると碎土率が低下し、植え付け溝の陥没や空洞が発生しやすくなるため注意してください。

4 ユニフォーム粒剤の処理について

ユニフォーム粒剤はトレンチャーの深さまで薬剤を混和させて使用してください。植え付け部分のみ（表面混和）の処理は効果が落ちることが確認されています

（令和3年度十勝農協連試験結果参照）。



5 植え付け作業について

- ・ 植え付け作業は、地温が10℃以上になってから開始してください。
- ・ 覆土は5～6cmになるように植え付けしてください。深すぎると萌芽の遅れ、浅いと乾燥による芽傷みにつながります。

マルチ設置のメリット

- ①雑草の抑制、②初期生育の向上、③越冬後の腐敗の抑制（春掘りで越冬時にマルチをはがさず使用した場合）

< たまねぎ >

1 除草剤の注意事項

- ・土壌処理は、活着を確認し、気温が低く土壌水分のある条件で実施してください。
- ・キク科雑草の多いほ場では、グラメックス水和剤が効果的です。ただし、薬害が出やすいため、気温の低い夕方に処理してください（5月下旬までに）。また、砂土や水はけのよい土壌では使用を避けてください。

表1 たまねぎ除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法及び使用時期	使用回数	10a 当薬量
ゴーゴーサン乳剤 ^{※1}	全面土壌散布 定植後（雑草発生前） 但し、収穫 30 日前まで	1 回以内	300～500 ml
モーティブ乳剤 ^{※1}	全面土壌散布 定植後（雑草発生前） 但し、定植 45 日後まで	1 回以内	200～400 ml
グラメックス水和剤	定植活着後（雑草発生前） 但し、収穫 30 日前まで	1 回以内	30～50g ^{※2}

※1：ゴーゴーサン乳剤とモーティブ乳剤は同一成分を含むため、どちらか一剤の使用に限る。

※2：薬害を回避するため薬量を30～50g/10aとし、涼しい時間帯に使用する。

2 タマネギバエ防除

- ・せん葉による茎葉の残渣や補植後に不要になった苗はタマネギバエの発生源となります。ハウスやほ場の周辺には放置せず処理してください。
- ・移植後のほ場の土壌水分が高いとタマネギバエの発生が多くなります。成虫を確認したらダイアジノン乳剤40で防除してください。
- ・隣接株への被害拡大を防ぐために被害株は抜き取り、ほ場外で処理してください。

表2 タマネギバエの防除薬剤例

薬剤名	使用濃度	使用時期	使用回数
ダイアジノン乳剤40	700倍	収穫21日前	2回以内

< ごぼう >

1 ほ場の深耕について

- ・ほ場が湿潤な時期に深耕すると砕土率が低下し、発芽不良や岐根(きこん)となるため注意してください。

2 は種作業について

- ・地温が10℃以上になってから、は種を開始してください。
- ・発芽を揃えるために、は種深度は2～3cmとします。
- ・は種位置、施肥位置が深耕施工位置からずれないようにします。
- ・は種後は、鎮圧を実施しましょう（乾燥時の発芽率を高めるため）。

3 除草剤処理について

- ・除草剤の処理層の形成には土壌水分が必要なので、ほ場表面が湿っている時に散布すると効果が高まります。
- ・アグロマックス水和剤は、薬害回避のため、発芽時の地割れが発生する前までに処理を行いましょう。

表3 ごぼう除草剤の使用基準

薬剤名	処理方法及び使用時期	使用回数	10a当薬量
アグロマックス水和剤*	全面土壌散布 は種後発芽前(雑草発生前)	1回以内	200~300g

※砂土では薬害を生じる恐れがあるため、使用を避ける。

< キャベツ・はくさい・レタス >

1 ほ場準備

- ・排水不良ほ場では生育不良になりやすいため、定植前にサブソイラ等で排水対策を行ってください。
- ・石灰欠乏(チップバーン)対策として、ほ場pHは6.0を目標に矯正を行ってください。ほ場のpHを上昇させたくない場合は畑のカルシウム等の資材を施用してください。

2 育苗期後半の管理

- ・定植前にハウスの開放などにより順化させ、徐々に苗を外気にならしめてください。

3 害虫対策(キャベツ・はくさい)

- ・定植当日にジュリボフロアブル200倍液をセル成型トレイにかん注してください。

表4 コナガ・アブラムシ類の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度	使用時期	使用回数	注意事項
ジュリボフロアブル	200倍	育苗期後半~ 定植当日	1回以内	・セル成型育苗トレイ1箱あたり 0.5l かん注

4 菌核病・すそ枯病防除(レタス)

- ・病害の発生が懸念される場合は育苗期後半~定植当日までにパレード20フロアブルをかん注処理してください。

表5 レタス病害の防除薬剤例

薬剤名	使用濃度	使用時期	使用回数	注意事項
パレード20フロアブル	100倍	育苗期後半 ~定植当日	1回以内	・セル成型育苗トレイ1箱あたり 0.5l かん注 ・ジュリボフロアブルとの混用は薬 害を生じる恐れがあるため避ける

5 定植について

- ・苗の植付深度は、乾燥や低温を考慮してセル培土が見えず、子葉が埋もれない程度の深さで行ってください。
- ・ほ場が乾燥している場合は、地際部の鎮圧をていねいに行ってください。

< にんじん >

1 抽苔^{だい}対策と生育促進

- ・にんじんは、生育初期(5~6葉期まで)に10℃以下の低温に25日以上さらされると花芽が形成され、その後20℃前後の高温と長日条件で抽苔が始まります。
- ・べたがけ資材を活用し、生育初期の温度を確保してください。

○春の農作業事故防止

★春の農作業事故は、機上作業中に足を滑らせ落下する例や機械の乗降時に滑り落ちる例、トラックのアオリで手や指を挟む例が多く見られます。

みんなで声をかけあい、安全作業を心がけましょう！



○周辺作物への農薬飛散防止の徹底

★除草剤散布など、スプレーヤを使用する作業が増える時期です。

隣接する作物に除草剤などの農薬が飛散すると、生育が大きく阻害されたり、定められた残留基準を超える残留農薬が検出されることがあります。トラブルを回避するためにも、風の向きやドリフト低減ノズルを使用するなど、周辺作物への飛散に十分注意しましょう。

★散布後のスプレーヤの洗浄はしっかり行いましょう